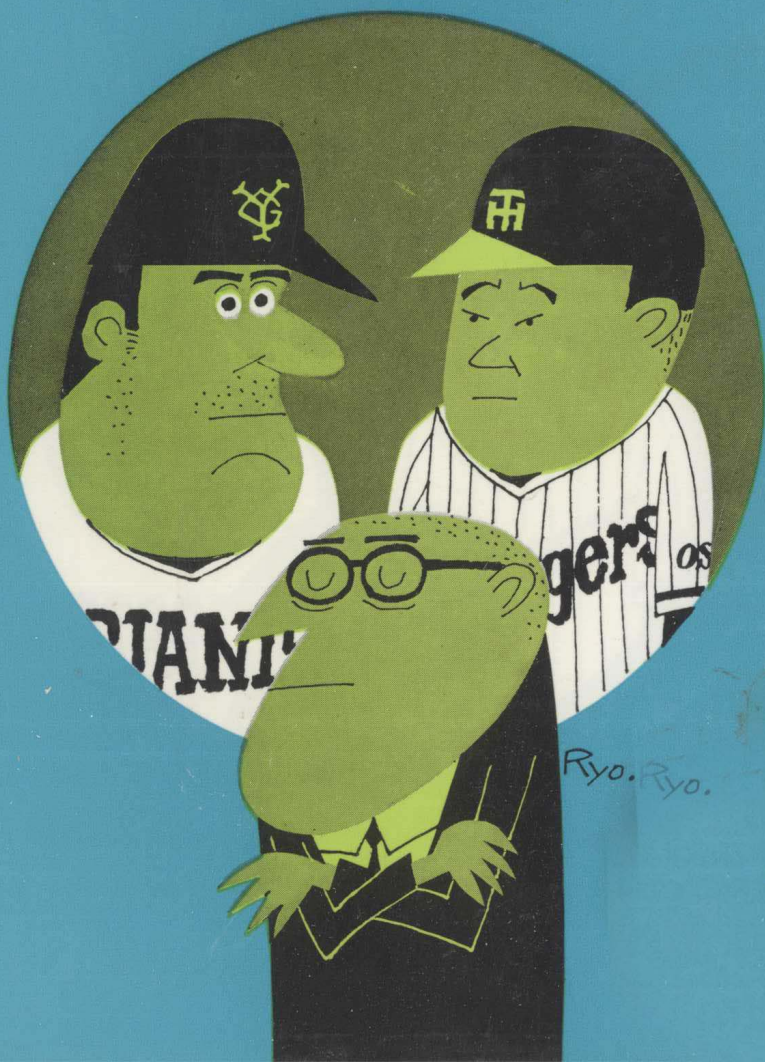


巨人ファン善人説

男性自身シリーズ

山口 瞳



巨人ファン善人説

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社

巨人ファン善人説

(きょじんふあんせんにんせつ)

■男性自身シリーズ13

■定価八八〇円

昭和五十二年八月二十五日発行 昭和五十六年七月十五日五刷



© Hitomi Yamaguchi, Printed in Japan, 1977.

著者——山口瞳 (やまぐちひとみ)

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 郵便番号*一三三

電話*業務部 東京(〇三)二六六一五二二

編集部 東京(〇三)二六六一四二二

振替*東京四一〇八

印刷所——二光印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

*乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

*
目次
*
*
*



常盤御膳	河津町葛蒲沢	浅草	畏友伊丹十三氏	長島茂雄監督	講演旅行	風が吹く	絵の話	風景画	野球が変った	二十二歳	わからない	毎日毎日
70	65	60	55	50	44	39	34	29	24	19	14	9



老人問題——その側面の一面

岩手県種市海岸 80

高校野球 85

また、高校野球 90

高校野球戦術 95

近頃困ること 100

冗談じゃない 105

観月会 110

男たち 115

茄子の花 120

鮮やかな 125

巨人ファン善人説 131

亭主関白 136

四十雀の健康	201
勝負事	196
渴仰者	191
あなた変りは	186
出版業のこと	181
酒乱の種類	176
突然の御指名	171
秋の一日	166
手鞠地蔵	161
絨毯のこと	156
京の夢	151
父の叱言	146
TV番組から	141



色川武大さん	274	一人住まい	269	青嵐の頃	264	花のあと	259	掛布の六番	254	すみません	249	九州	244	新聞	239	マルハゲ	233	人を馬鹿にしている	227	きみを愛す	221	やわらかい頭	216	人生の辻褃	211	旅館の朝食	206
--------	-----	-------	-----	------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	----	-----	----	-----	------	-----	-----------	-----	-------	-----	--------	-----	-------	-----	-------	-----

カ装
ット
ト幞

柳
原
良
平

巨人ファン善人説

男性自身シリーズ
13

毎日毎日

四月二十一日(水)

昨日、将棋会館落成式のあと、新宿の新瀧料理の店で酒を飲んだ。田丸昇五段、真部一男五段、伊藤果四段、それに放送作家の安倍徹郎さんの五人である。こういう日は、やはり酒を飲むべきものであろう。将棋指しは、どんな場合でも、おめでとうございますと言って乾盃する。負けた棋士は、その相手に対して、おめでとうと言う。私は、この慣習が好きだ。

ゴールデン街で飲み、それから、田丸さんと安倍さんの三人で、田丸さんの婚約者である谷川治恵嬢の家へ行った。こういうのを「いい齢をして」とか「齢甲斐もなく」と言うのだろう。しかし、谷川嬢は、さすがに棋士の妻となる人だけあって、将棋盤を出して待っていた。安倍さんと谷川さんの将棋を見ながらウイスキーを飲んだ。

そういうわけだから、この日の私は、へたばっていた。四時ごろ、関保寿先生が来られ



た。Iさん、Yさんが一緒である。その三人はすぐに帰った。酒とイカのシオカラを持つてきてくださったのだけれど、昨日の今日なので飲むわけにはいかない。

三十分ほどして、関先生から電話があった。近くの谷保駅やほえきのそばの文蔵というヤキトリ屋で飲んでいるが出てこないかという。こういう際は、勇気とか気力とか決断とかいいうのと別種の気持であって、もしかしたら、情性じやうせいという意味を含めた恋愛感情にちかいはないかと思う。あるいは、山火事の報を聞いた宿醉しゆくさいの老いたる森林警備隊員の心境であろうか。文蔵は、地もとの人たちの集まる一杯呑み屋である。殊にも国鉄のストライキ中の一日であって、客はすべてどこかで見た顔である。

関先生は、ヤキトリ屋では、もっぱらレバーを召しあがる。私もそうだ。あの硬いナンコツを一度に三本も注文する客がいるが、どうしたってこれを尊敬しないわけにはいかない。見ると、犬のような歯をしている。そいつが白い歯を光らせて、ニヤツと笑う。

四月二十二日（木）

赤坂の弁慶橋のたもとにあるサントリーのビルの一階にある茶展という喫茶店で、将棋の原田泰夫八段、大内延介八段と待ちあわせることになっている。

ひとつは、会社における私の立場が変わったので佐治敬三社長に挨拶あいさつするため、もうひとつは、将棋会館建設の寄附をお願いするためである。サントリーの社員になってから、ほぼ二十年になるが、この二十年間は、会社にとっても私にとっても大変な時期であったという話を話しているうちに、さすがに胸が詰まった。

そのあと、将棋会館に寄って、打合わせをしたり、名人戦第二局の棋譜をならべている

うちに四時になった。さあ、どうするか。いったんは、これで別れようということになった。それが最善手ではないか。

それがどうして大内さんと二人で新宿に出るようになったのか、まったく思いだせない。新宿の小料理屋で、大内さんが、今日は山口さんの大変な日に立ちあつたことになるんですねと言ったとき、やはり飲むべき理由はあつたのだと思つた。おめでとうございます。

私は、中年の和服の仲居に、オッパイにさわらせてくださいと言つた。そう言つて胸のなかに祝儀袋をいれた。しばらくして、彼女は血相を変えてやつてきた。こういうものを貰うわけにはいかないと言う。そうすると、彼女は、本当に私がオッパイにさわりたいと思つて手を突っこんだと思つたのだろうか。判断に苦しむ局面である。

ゴールデン街へ行くと、私が編集者であつたころ何度か原稿を取りに行つたことのある女流作家に二十年ぶりでお目にかかつた。二十年に縁のある日である。それでどうなつたかという、その女流作家に私の家へ来てもらつて、深夜まで飲むことになつたんですね。

四月二十三日（金）

梶山季之の『小説GHQ』の見本が届いた。私が解説を書いている。夕刻、角川書店から出る私の短篇集の見本が届いた。こういう日は原則として酒を飲むことになっており、また、それが礼儀だとも思う。

四月二十四日（土）

朝、関保寿先生がユバを持ってきてくださる。私は、まだ寝ていた。寝起きで、どうも、

世の中のことがはつきりとしなない。それで、自転車に乗って散歩に出ることにした。自転車で散歩というのは言葉としてはおかしいが、心持を言ったまでのことである。

関先生と二人で大学通りに出て自転車^{てい}を漕いでいると、向うから、関先生の弟の、石の彫刻家の関敏先生^{さとし}がやってくるのがわかった。この先生も自転車である。そこで、三人で、富士見通りの繁寿司で朝食を摂ることにした。

ビールを飲んだ。前日、前々日のことがあるから、コップ一杯で体があたたかくなり、やわらかくなり、世の中の全体があたたかくなり、人間が軟弱になってくる。ああああ、という感じになる。

関保寿先生の所でウイスキーをいただく。すると、いつのまにか、あたりが薄暗くなっている。そこで、また、文蔵へ行くことになった。心のなかで、早く裏を返してよかったなどと思っている。関敏先生を家へ引っぱってきて遅くまで飲む。

四月二十五日（日）

タラの芽を採る。これは二度目で、最初の芽を太郎んぼ、二度目を次郎んぼと言うらしい。三度採ると木が枯れるという。お向いの彫刻家の今城国忠先生が来られたのでビールを飲む。

四月二十六日（月）

石井代蔵さんの出版記念会に出る。K社のOさん、B社のTさんと三人で新宿へ行く。最初に二十二日に行った小料理屋へ寄る。先日のオッパイの仲居が嬉し^{うれ}しそうにしている。

ゴールデン街附近で三軒。深夜でも人通りが多いので驚く。すこし離れたところにあるMという酒場へ行くと、田村隆一さんが寝ている。私が起こしたが起きない。こんどはOさんが田村さんの席へ行った。編集者というのは手荒なことをするものだ。

田村さんが来て歌になった。田村さんは、起きた起きたと言った。しばらくして、また、起きた起きた、本当に起きたと言った。オキタソウジだと言った。田村さんは、なかなか螢の光を歌わしてくれない。待て、螢の光は二番か三番あとだと言った。それが何回かあって、やっと螢の光になり、手をつないで、ぐるぐる廻り歩いた。

四月二十七日（火）

関保寿先生と息子の庄助と三人で、陶芸家の辻清明先生の所へ行った。着いたのが十二時半である。辻先生の家は聖蹟桜ヶ丘の山の上にあり、窓をいっばいにあけはなつて、上衣を脱いでいるのがちよいどいいような、何とも気持のいい日だった。見えるのは新緑ばかりである。

この日は、辻先生の徳利をいただくことになっている。朝から洩るかどうかテストをしているそうで、なかなか物件があらわれない。それが出てくるまで、にがり酒とワインをいただく。徳利が来ると、むろん、それに酒を通すことになる。私は天長節の歌を歌った。今日の吉き日は大君の生まれたまいし吉き日なり——。

わからない



私のような者にとっては、この世は、わからないことばかりである。わからないことで満ち満ちている。たとえば、電気に関することなどは、皆目わからない。いくら易しく説明されたってわからない。こういうものは、生理的にうけつけない。スイッチを押せば電気が点くということしかわからない。それでもって生きているのは不思議であるが、私などは、本当には生きていないのかもしれない。だから、電気に類する話はやめよう。

私は、いまだに、青と緑の区別がつかない。これはモノを書くときに非常に困ることである。「青い山脈」というときに、人は何色を思い描くだろうか。空色であろうか。それとも緑色であろうか。あるいは、空色と緑色の混じたものであろうか。遠くに見える山脈は、季節によって、天候によって、空色に見えたり緑色に見えたりするから困る。

「青毛の馬」というのは何色の馬であらうか。これは、はっきりと黒である。しかし、あまりに黒々としていて緑色に光って見えるという意味があるらしい。「緑なす黒髪」と同